

第 35 期第 6 回研究会「帝国とメディア史研究—満洲電信電話株式会社を事例に」（メディア史研究部会企画）終わる

日 時：2016 年 6 月 9 日（木） 17 時 00 分～19 時 00 分

会 場：同志社大学室町キャンパス寒梅館 6 階会議室

問題提起者：本田毅彦（京都女子大学）

討 論 者：白戸健一郎（筑波大学）

司 会：福間良明（立命館大学）

参加者：19 名

記録執筆：福間良明

近年、ソフト・パワーに関する歴史研究や文化冷戦など戦後期におけるメディア政策に関する研究が蓄積されている。アメリカの広報外交研究やパブリック・ディプロマシーに関する研究が一定の進展を見せる一方、メディア史研究の分野においても、佐藤卓己・渡辺靖・柴内康文編『ソフトパワーのメディア文化政策』（2012 年）なども出されている。

だが、異なる文化的・民族的背景を持つ集団に対し、ハード・パワーではない形式で影響力を行使しようとする方法は、むしろ、帝国という多民族空間のなかでこそ重要であったはずである。そこには、学問やメディアを動員しながら、さまざまな包摂や統合の施策が模索されてきたのではないか。そこには、こうした動きのさまざまな可能性や矛盾、限界といったものが、濃密に浮かび上がっているのではないか。

本研究会では、2016 年 2 月に公刊された白戸健一郎氏の『満洲電信電話株式会社 そのメディア史的研究』（創元社）を手がかりに、これまで英領植民地インドに関するメディア政策研究を進めてきた本田毅彦氏に問題提起をしてもらい、白戸氏がそれに応答する形で、メディア文化政策を推進するうえで帝国が抱えた問題系について議論を深めた。

研究会においては、大英帝国と大日本帝国、満洲国（満洲帝国）のメディア史的・社会的状況の近接性と相違、「帝国」や「多文化状況」をメディア研究においていかに捉え返していくのか、満洲電電が残した「遺産」の戦後への連続性といった点について、活発な議論が展開された。